

# 『孔雀東南飛』と『心中宵庚申』

——日中の夫婦心中劇——

向 井 芳 樹

ために正式な結婚が許されず、それが原因でいわゆる「心中」をした例は過去・現在とも中国にもあるに違いない。

若い男女の自殺は、現在の中国でもかなりあるようで、数年前の万里長城での爆弾による若者の心中事件は、周りの無関係の人まで巻き込んだことで、有名になっている。結婚問題に苦しんで自殺を選んだ若い男女の農薬心中なども、その実例を確かめたこともある。このような事件としての「心中」は存在するが、その死を中国では、果たしてどう呼んでいるのか。

『笑府・上』（明代末）の百十二話に「拳を打つ」があり、「遊女と客が死ぬ約束をして、毒酒を用意して、客が先に飲むが、遊女は拳で負けたら飲むと言った」という小話が残っている。動機や結末

など詳しいことは当然省略されているが、日本の「心中」の原義である遊女の「心中立て」の状況と同じであるから、似た事件があつ

「心中」という日本語は、元々「心の中」を意味していた。勿論、中国でも当然同じ意味であつた。ところが、日本では三百年か四百年ぐらい前の江戸時代から、遊女が客に「心中立て」をして一緒に死ぬという意味を新たに持つようになった。中国語の「心中」には、現在でもこの「自殺」の意味は付け加わつてはいない。

そのために、中国では男女の自殺としての「心中」はないと錯覚されていた。自殺についての考え方や、死後の世界に対する考え方や、宗教観の違いから、日本の「心中」に相当するものはないという誤解すらあつた。

しかし、実際には若い二人の男女が結婚出来ないことを苦にして自殺することは、勿論中国にも無いわけではない。親の反対などの

たに違いないが、このような事件に対する固有の表現は作られなかつたようである。

どうも「心中」を意味する中国語は「情死」または「殉情」であるらしい。そのうちでも、「殉情」の方が日本語の「心中」の意味に対応しているようだが、新聞・雑誌などに使われて一般的になっている用語とは言えない。

実例としては、中国の辞書である『辞海』の「近松」の項目に、彼の作品として『曾根崎心中』があげられており、その中国語訳は『曾根崎殉情』である。その後、別に『曾根崎心中』を中国に翻訳したものが出版されたが、それにも『曾根崎鴛鴦殉情』と名付けられていることから、「殉情」が「心中」に対応する中国語だと考えてよさそうである。我々にも「殉情」は「殉死」からの連想で「人情・愛情に殉じて死ぬ」という意味が容易に理解される。

若い男女が晴れて結ばれないこと、即ち結婚出来ないことを悲しんで、二人で一緒に死ぬことが、当然中国でも、いわゆる「心中」の一番多い事例であるらしい。

京劇の中に『鴛鴦塚』というのがある。謝招郎と王五姐の悲恋劇で、女が病死したので、男はそれを悲しんで死ぬ。同時に死ぬのではないから、「後追い心中」ということになる。

他に、京劇・歌劇の『梁山伯と祝英台』があり、男・梁山伯が

女・祝英台の親の反対で、結婚出来ないことを嘆いて死ぬと、女は親の強制する結婚式の当日、二つに裂けた男の墓に飛び込んで死ぬ。「後追い心中」型であるが、これらは心中劇に準じるものということができるが、やはり、「心中」に相当するような言葉で、一括されてはいない。

## 二一

中国古典劇にも夫婦心中劇があった。一千七百年から一千八百年も昔、漢の時代の『楽府』にある「古詩」に素材を求めた夫婦心中を扱ったもので、夫婦二人で川に投身自殺する芝居である。

中国に滞在中、機会があるたびに、私は中国の演劇関係者に、心中劇が中国に存在しているのかと、尋ね回ったのだが、予想に反して誰の口からも、すぐに『孔雀東南飛』という「京劇」があるという返事が返って来た。ただし、若い学生や俳優達はこの作品の存在を知らなかったようである。そのうち、それは「京劇」に限らず、その他の地方古典劇にも同じ題名の夫婦心中劇が、現存していることが判明して来た。

さて、その内容について質問を繰り返しているうちに、この心中劇の主題は、封建時代（中国の封建時代は、日本の古代に大体相当し、日本の時代区分としては異なっている）に、親の権限を認め過

きた誤った道徳観や制度・習慣が行われていたのに対しての批判であることが、みんなの一致した見解・評価であると判明した。

ところが、劇の筋を聞き始めると、粗筋としては変わらないのだが、こちらが一番聞きたい「心中」の動機やその方法や評価のあたりになると、どうも話が違っていて、大変変化に富んでいて、幾つもの「孔雀東南飛」があつたと考えねばならないことになって来たのである。

これでは、脚本を見ないことには、どうにも確かめようがなく、中国での私の狭い行動範囲の中では、それを見付けることが出来な  
いま、もう日本に帰ってから作品探しを始めねばと、諦めていた。

北京で知り合った数少ない京劇の女形（中国古典劇ではもともと  
は女性の役はすべて男性が演じており、「男旦」という語がそれに  
相当する）の温如華さんが、「孔雀東南飛」の連環画（日本の劇画）  
の小さな絵本を持って来てくれた。やっと巡り会えた訳である。更  
に日本に帰ってから調べてみると、原拠の古詩は、日本でも既によ  
く知られており、研究や翻訳も勿論数多くあつたことが判ってきた。

村松映氏の『中国列女伝』（中公新書）に「焦仲卿の妻の悲劇」  
として紹介されているのを見ることが出来た。ただし、俗称として  
の「孔雀東南飛」の名前だけは紹介されているが、京劇の脚本『孔  
雀東南飛』のことも、また解説文中に「心中」の語もみられないの

で、中国詩や中国文学の研究者の視点からは、心中劇といった角度  
からの分析はされていないことも判ってきた。

### 三

さて、「孔雀東南飛」は、楽府という古詩の形で残っている民間  
説話を伝えた物語詩「焦仲卿の妻の為に作る」（作者不明『為焦仲  
卿妻作』）によつたものである。

『玉台新詠集』所収の漢樂府で、二世紀から三世紀にかけてのこ  
ろの古詩であるが、冒頭の一句が「孔雀東南飛 五里一徘徊」で始  
まっているので、「孔雀東南飛」がこの詩の俗称にもなり、後の京  
劇などの脚本の名称にもなつたようである。

古註によれば、夫婦が離別するときの比喻として、古くからの  
雄雌の孔雀が東南に飛び去ることが詠まれており、「飛來双白鶴  
乃從西北來 孔雀東南飛 五里一反顧 六里一徘徊」の詩句と並ん  
で、この詩句には雄鳥が遅れた雌鳥を氣遣つて、五里毎に戻つて来  
ていたわるといふ意味があるらしい。

孔雀の雌雄は東と南に別々に分かれて飛ぶという解釈が、日本で  
は行われているようであるが、中国の古註に従つた方が理解し易い。  
『孔雀東南飛』は、この詩を素材にして後に作られた古典劇の脚  
本名で知られており、それは京劇だけでなく、河北梆子劇・柳琴戲

などの地方古典劇や歌曲にも残っていて、新中国の成立後に、広く復活してきたものの一つであるらしい。

今、内田泉之助氏の『古詩源 上』（漢詩大系・4）によって、その紹介をしておきたい。

原詩の「序」には、「漢末建安（196—220）年間、廬江府の小官吏、焦仲卿の妻劉蘭芝が、姑のために離婚させられ、再婚しないことを誓っていたが、家人に強制され、投身自殺して果てた。焦仲卿はこれを聞いて庭の木に首を吊って死んだ。時の人がこれを傷んで詩に残した。」とある。

漢の時代の末の頃（三世紀の初め）、廬江府（今の安徽省の辺り）に、焦仲卿という小官吏がいた。その妻は劉蘭芝という美しい女性であった。

十三能織素 十四学裁衣 十五弹箜篌 十六誦詩書 十七為君婦  
 彼女は、十三歳で上手に機を織り、十四歳で裁縫を覚え、十五歳で「くぐ」という豎琴の演奏が出来、十六歳で詩書を暗唱し、十七歳で焦仲卿の妻となった才色兼備の女性であった。

この詩句は劉蘭芝の母の側から、次のように繰り返されておられ、後の京劇などでも歌われる有名な詩句である。

十三教汝織 十四能裁衣 十五彈箜篌 十六知禮儀 十七遣汝嫁  
 姑には、むしろこのことのゆえに疎まれ、新婚二・三年しか経た

ない内に、仕事が遅いとか、勝手な振舞いが多いとか、礼節に欠けるとかの難癖が付けられ、離縁されてしまう。この嫁いびりが、この詩の重要な趣向の一つで、後の京劇でも、見せ場の一つになっている。

妻を愛する焦仲卿は勿論反対はするが、母親の強い態度に逆らうことが許されず、やむなく従がわされてしまう。

感君区区懷 君既若見錄 君当作磐石 妾当作蒲葦

蒲葦初如絲 磐石無轉移

男を磐石に、女を蒲葦にたとえて、お互いに再婚はしないと、固く約束して別れて帰る。

実家に返されて来た劉蘭芝は、兄に彼の上司との再婚を強要され、やむなく嫁入りさせられるはめになる。

賀卿得高遷 磐石方且厚 司以卒千年 蒲葦一時初

便当旦夕間 卿当日勝貴 吾独向黄泉 何意出此言

同是被逼迫 君爾妾亦然 黄泉下相見 勿違今日言

その噂を聞いて訪ねて来た焦仲卿と会った劉蘭芝は、別れの際の誓いの言葉を繰り返しながら、お互いの身の不幸を嘆き、それぞれ自らの死ぬ決意を告げ合い、別れる。

新婚の夜、ひそかに寢室を抜け出した劉蘭芝は、「我命絶今日魂去屍長留」と、近くの池に身を投げて死んでしまう。（拳身赴清

池)

その知らせを聞いた焦仲卿も、すぐに庭の木の枝で首を吊った。

(徘徊庭樹木 自掛東南枝)

両家求合葬 合葬華山傍 東西植松柏 左右種梧桐

枝枝相覆蓋 葉葉相交通 中有双飛鳥 自名為鴛鴦

仰頭相向鳴 夜夜達五更 行人駐足听 寡婦起彷徨

二人の死を悲しんだ両家では、二人を合葬する墓を作つて葬った。

その墓の上に植えられた樹木に雄雌の鴛鴦が住み着き、毎夜明け方近くまで悲しげに鳴いていたという。この鴛鴦が二人の生まれ変わりであるという解釈が多く行われている。

結びは、「多謝后世人 戒之慎勿忘」で、世人に「嫁いじめの弊」

(内田氏の解釈)を慎むことを戒めている。

中国でのこの詩の評価について調べると、例えば『古典文学三百

題』(上海古籍出版社)は古典文学の三百の評論解説を行ったもの

であるが、その最初の項目に『孔雀東南飛』はどんな物語を叙述しているか(王国安担当)があり、次のように解説されている。

一、二百五十余句 一千七百四十五の文字 古典詩歌中の最高傑作である。

二、反封建精神の強い光を輝かせている叙事詩である。

三、母親や兄の行為や態度に、封建制度の持つ悪の本質が良く表

『孔雀東南飛』と『心中宵庚申』

われている。

四、それに戦つて「殉情」の死の道を選んだ、二人の夫婦の行為と態度に、当時にあつて可能な一番強烈な反抗精神が現れており、肯定的に描かれた彼らの死への賛美の歌は、封建勢力の敗北を示している。

結びの「戒め」についても、これらの批評は劉蘭芝と焦仲卿の反抗を称えるもので、夫婦の死を悲劇として扱う視点は無さそうで、日本の心中劇の評価につながるものは少ないようである。

この詩の評価としては、主人公達は二人の愛情に殉じて、死で圧迫するものに反抗する意志を示したもので、作者も同情的な態度で主人公達の物語を描こうとしていると、封建道德の人間に対する罪悪の告発の側面が特に評価されている。

この詩の中には、封建道德や封建制度に対する批判は、直接的には全く表現されてはいない。母親の権限で無理に離婚させたことに對して、それを批判するような表現は作品中の人物の言動にも、作者の批評の言葉の中にも表わされていない。その時代にそれが可能であったはずはない。当然のことである。今の読者や観客には、現在の感じ方や考え方に合わせて、この詩の中に時代を越えた人間らしい悲しみのドラマの存在を読み取ることが出来たのである。

## 四

京劇の『孔雀東南飛』について調べているときに、気が付いたことがある。

私は、近松の世話浄瑠璃を論じたときに、『曾根崎心中』のお初  
の劇中で果たす役割を重要視して、劇の中の主導権をもっており、  
劇の結末についての予見力をもっていることに注目し、心中の動機  
や行為を検討評価して来たので、ここでもその視点からこの心中劇  
を考えようとしている。

そこで、心中の決意を男女のどちらが先にするか、またどちらが  
先に死ぬか、それぞれがどのような死に方をするのかを問題にする  
のであるが、これらが聞く人によって違った答えが返って来て困っ  
たことがある。

男が先に死ぬ決意を示し、女がそれなら私も言ったというもの、  
女が先に死ぬと言ひ、男もそれに同意したというもの、お互いに自  
分は死ぬが、相手には死なないように言ったというもの、池に飛び  
込んだのでは人にすぐ助けられたりするので河を選んだとするもの、  
二人揃って河に身を投げたのだというもの、最後の死に方について  
も、二人が一緒に水に飛び込むのもあり、飛び込む場所も、池の場  
合と川の場合などである。

連環画の『孔雀東南飛』や京劇叢刊に入っている脚本『孔雀東南  
飛』では、元の詩の通りの展開で、妻が池に身を投げて死に、夫は  
後を追って首を吊って死ぬ。別々の場所で別々の死に方をしている。  
『心中天の網島』の心中の場面の設定に少し似ているところがある。  
その点で言えば、これを夫婦の心中と見てなんの差し支えはないは  
ずである。

京劇の『孔雀東南飛』では、母親の姑を見るからに意地悪な老婆  
として描いている。脚本でも嫁いびり劇の設定になっている。これ  
は元の詩でも既にそう書かれているのだが、離縁して追いつ返す大  
きな原因の一つとして、隣家の若い娘の方が家の財産もあり、美し  
いので、それに取り替えたいためという理由が上げられている。この  
打算が強調されればされるほど、母親の醜さが強くなり、嫁の劉蘭  
芝への同情が強まるはずである。

ところで、この強烈な嫁いびりも劇の見せ場の一つで、地方劇の  
河北梆子劇・柳琴戲・越劇・星腔（歌曲）などの『孔雀東南飛』  
（全曲ではなく、その一場面のもの）の録音テープは、ちよ  
うどその場面のもので、かなり厳しい嫁いびりが歌われている。

中国古典劇では、どこの地方劇でも「唱」という歌が中心で、劉  
蘭芝の悲しい歌も聞かせ所ではあるが、焦仲卿の母の嫁いびりも重  
要な聞かせ所になっている。

五

京劇の『孔雀東南飛』の脚本は、1955年「京劇叢刊」第三十二集（中国戯曲研究院編集・新文芸出版社）に入っている。同書の解説は、次の通りである。原詩との間には、微妙な違いがある。

作者姓名不詳の有名な長詩で、家長専制制度の時代に犠牲になつた若い男女を描いたもの。粗筋は、芦江府の小官吏焦仲卿の妻、劉蘭芝は才色兼備の女性で、夫婦仲も良かったが、焦仲卿の母が意地悪な性質で、嫁いびりが激しく、焦仲卿は無理に劉蘭芝と離婚させられてしまう。別れに臨んで焦仲卿は再び嫁を迎えないことを、劉蘭芝は再婚しないことを誓い合つた。劉蘭芝は実家に帰ると、兄が自分の欲のために、上役の青年との結婚を強制した。劉蘭芝は拒否したが、無理に結婚させられることになつた日の夕刻、焦仲卿が噂を聞いてたずねて来て、門前で出会う。お互いに嘆きながら、死んでも約束は守ると決意する。焦仲卿の帰つた後、劉蘭芝は投身自殺をし、焦仲卿は彼女の墓の前で首を吊つて死ぬ。

今一つの資料として、京劇の『孔雀東南飛』のビデオ（1982年北京京劇院二団公演 北京中央電視局録画）がある。京劇の中にも、たくさん異なつた脚本があり、その題名も『廬江恨』・『焦仲卿妻』・『生死縁』などがある。

『孔雀東南飛』と『心中宵庚申』

私の見ることのできたものの中で、全曲の収められているのは、京劇叢刊の『孔雀東南飛』とビデオ『孔雀東南飛』の二つである。この二つの京劇『孔雀東南飛』を、比較しながら古典劇になつた夫婦心中劇を考えてみたい。

京劇叢刊『孔雀東南飛』をAとし、ビデオ『孔雀東南飛』をBとする。

登場人物でも、両者は一致していない。

A	一九五五年	脚本	B	一九八二年	上演用	配役
	焦仲卿	廬江の小役人		焦仲卿		姚玉剛(小生・二枚目)
	劉蘭芝	焦仲卿の妻		劉蘭芝		呉素秋(青衣・立女形)
	焦母	焦仲卿の母		焦母		馬玉増(文丑・道化役)
	焦小妹	焦仲卿の妹		焦小妹		(焦の母)
	春梅	焦家の小間使い		春梅		(焦月華)
	劉母	劉蘭芝の母		劉母		干永清(花旦・若女形)
	劉大	焦仲卿の兄		劉大		(なし)
	崔三	崔太守の第三子		崔三		郎石林(老旦・老女形)
	秦羅敷	焦の隣家の娘		秦羅敷		(劉洪)
	張不才	墓守		張不才		(劉白)
						葉萍(文丑・道化役)
A	京劇『孔雀東南飛』	一九五五年		江洋		(小生・二枚目)
		脚本				

第一場 焦の家・客間

母が嫁の劉蘭芝をいびっている。  
妹は姉嫁をかばう。

第八場 墓場

は妻の死を知り、駆け出す。

墓守に妻の墓を確認し、夫は嘆く。

息子焦仲卿が帰って来るので、家族で歓迎する。

舞台は、春の景色に変わり、妻が現れ、永遠の愛を歌う。

第二場 焦の家・蘭芝の部屋

夫婦の愛の語らい。楽器の演奏。

第三場 焦の家・客間

母が、息子に妻を離婚せよと迫る。

母の声で、幻覚は消え、墓のそばの木で、夫は首を吊る。終幕

第四場 焦の家・蘭芝の寝室

夫婦の嘆きと悲しみ。

B 京劇『孔雀東南飛』 一九八二年 テレビ上演分

二人で逃げようという夫と、夫を不孝ものにはしたくないと嘆く妻。

第一場 焦の家

焦仲卿の自己紹介と現状の述懐。母と妹は、

妻は部屋を出て行く。

劉蘭芝が里帰りして帰って来ないことに不満

第五場 路上・車と馬

鴛鴦橋での別れ。妻は車に乗っており、夫は馬で追い掛けて来る。

を漏らしている。焦仲卿が妻を迎えに行くことになる。

第六場 劉の実家・庭

母の嘆き。兄の友人太守の息子が妹を見初める。兄は再婚を勧める。

第二場 劉の実家

劉蘭芝の述懐。実母が病気でその看病のため、帰りが遅れること。姑の厳しいこと。

夫が追い掛けてきて、妻と会い、死ぬ約束をする。

兄が意地悪すること。焦仲卿を迎えに来るので、二人で家に帰ること。

妻は、ひとり池に飛び込む。

第三場 帰路・焦の家

二人で家に帰って来る。二人の詫び言に対する母の怒り。

第七場 焦の家・客間

息子が再婚させようとしている。息子が帰って来る。

兄が刃物を持って復讐に来る。夫

兄が刃物を持って復讐に来る。夫

焦仲卿に役所から迎えが来るので、出掛けて行くこと。



母の命令で機織りを始める。母は監視している。嫁いじめの数々。

機織りの途中で寝てしまふ。明かりを付けるが、その燭台の置き場で困らされる。織り上がった布にけちを付けられ、棒でたたかれる。

#### 第四場 焦の家

焦仲卿が帰って来る。劉蘭芝の訴えを聞き、仕事を止めて寝室で休むことを勧めるが、母に立ち聞きされて、直ちに劉蘭芝の離婚

が宣言される。劉蘭芝は母と妹に別れを告げ、焦仲卿に送られて、焦仲卿の家を出る。

#### 第五場 路上

車を呼び、劉蘭芝を乗せて、劉蘭芝の実家まで送って来る。

#### 第六場 劉の実家

折りから劉蘭芝の兄をたずねていた上司の朱史のいるところに焦仲卿と劉蘭芝が帰って来る。朱史に劉蘭芝が見初められる。いきさつを説明する焦仲卿は、追い返される。夫婦の別れとなる。兄の再婚の勧めが始まり、強制される。

#### 第七場 路上・池

劉蘭芝の結婚の噂を聞いた焦仲卿がさまよ

って来ると、劉蘭芝の結婚式の行列に焦仲卿が出会う。嘆き悲しんでいるところに、

抜け出して来た花嫁衣装の劉蘭芝がやって

来て、二人が出会う。焦仲卿は激しく劉蘭

芝の不実を責めるが、自殺の決意を知り、

二人は池に飛び込んで死ぬ。終幕

いずれにしても、現代中国の京劇であるから、原詩に拘束されたり、解放前の京劇の筋立てや主題に従うのではなく、現代の思想や感覚に合わせての改訂が行われている。

AとBの間にある三十年程の時間は、教条的な、かたくなさを消しているし、上演時間に併せて時間短縮のための簡略化が顕著になっている。

主要な趣向である「嫁いびり」については、Aの方では劉蘭芝の兄が焦仲卿の母を突き飛ばす報復の場面が新しく付け加えられている。観客に対してのカタリシスを与えるものとも考えられるが、批判の意味が強いと考えるべきである。それに反して、Bの方は劉蘭芝・焦仲卿の夫婦が母の立ち聞きにも気付かず、僅かに仕事を止めると言った程度の反抗的な態度が見られるのみで、報復に相当するものは見られない。

死の場面も、Aの方では原詩の結末に即してはいるが、夫婦の幻

想の映画を入れて救いを用意したかに見えるのだが、結局母の声が入って消えてしまう処理をして、死の後の救済はない。近松が「心中」を描くときに採用した救済の姿勢は、当然のことながら中国古典劇にはないのである。

また、Bの方は女が川に飛び込むと、続いて男も飛び込むという幕切れで、すぐに幕が閉まってしまふ演出のため、死後の哀れさの余情はない。特に、中国古典劇では舞台装置がないので、川に飛び込む場合でも、女の方は袖をかざして座り込むだけであり、男の方も前方回転をして尻餅をつく、日本のトンボを切る形になるだけである。象徴的な演技の約束を知らない、最期の死の意味が伝わらないほどである。

日本の心中劇では、当然心中の動機・決意の過程・心中の実行などが、劇の中心になるのだが、中国の場合は、その主題を封建時代に対しての反抗だとする解釈が示すように、劇に描く場面が異なっているのである。

## 六

若い男女の心中は、結婚出来ないことが、直接の原因になることが多いのは、中国でも日本でも同じであるが、死後の世界に対する宗教的な考え方の違いが、一番の原因だと思われるが、死ぬ事をそ

のまま救済に結びつけることがない。それは、原詩の場合でも同じであった。

それに対して、夫婦の場合は、ともかく既に結ばれているのだから、そのような二人が心中するのには、彼らの夫婦生活の危機が、その原因であることになる。

近松の「心中宵庚申」などが、日本の場合、その例としては特に有名であるが、それは「夫婦心中」と呼んで、「心中」の原義の遊女と客の自殺とは一応区別している。夫婦が二人で心中するのは、外側からの二人を脅かして「心中」に追い込む原因が存在しているはずである。

江戸時代の家父長制度の封建制度では、若い夫婦は結婚する場合でも、また離婚する場合でも、その権限は家父長にあり、本人達の自由な意志は原則として認められていなかったから、封建時代の夫婦心中は、当然、家父長の権限によって離婚させられようとする若い夫婦の抗議的な意味をもった心中ということになる。

『心中宵庚申』の場合も同じで、母親が嫁を追い出そうとするのに、夫婦二人ともそれに抗する事が出来ずに、二人で死ぬことを決意したというふうには、作者の近松は筋を設定している。母親にも、「姑去り」という嫁を離縁する権限が認められていたので、それがむごい処置だという批判が、一般的に世間にあっても、特に関係者

の誰からも「姑去り」の行為が咎めようのないものとして、実際には存在していたのである。

劇の中では、作者の近松は実在するモデルへの配慮の問題もあり、また「姑去り」は当時は肯定されている行為であったので、大変モデルに気を遣って、姑である義理の母が悪役・敵役にならないように描こうとしている。

しかし、現在の文楽の舞台では、彼女を意地の悪い悪婆として演じる方が、観客に劇の流れを理解してもらい易いので、殆どそうなっている。

もし夫の半兵衛が、妻のお千世を義理の母の意向に従がって、離婚していれば、実際には心中事件は起こらなかったはずである。現実の普通の夫婦で、こうした形で夫婦が危機に陥った場合は、多分夫が妻を離別することで、局面を解決していたに違いない。

一方、妻に帰るべき実家がない場合などには、一方的な離婚は出さないとした定めもあったようだが、お千世の場合には立派な豪農の実家もあり、家風に合わないとの理由で離婚して片を付けることも可能なはずであった。

しかし、近松は半兵衛にお千世の父親と絶対に離別はしないという約束をさせる場面を、わざわざ書いており、あらかじめその可能性を閉ざしておいた。勿論、二人の間には深い愛情のあったことも

注意深く描いているので、妻の父親との約束のためだけ、義理のためだけで、心中したのではないように描いている。

夫婦という間がらでの「心中」がもっている特別な意味と、その状況に対しての配慮がされている訳である。実際にあった夫婦心中の事件を、劇化するに当たり、実説だとか、真相だとか言われる風説にと拘束されながら、今から見れば勝手気ままな親の権利の行使にも、正面からの批判対決はせずに、主人公達の立場に対して同情の涙を流させながら、制度やモラルに直接的には触れないで、観客を満足させるドラマを書く苦勞をしているのである。

## 七

本人達の意志に反して、姑の勝手な判断による離縁という設定は、日本・中国の古典劇ともに共通するものであった。夫婦心中という設定の場合は、その性格上、日中の国の違いを越えて一致している当然のものと考えられる。

主人公達の死に至るまでの間、その直接的な原因を作った母親や姑を、誰も咎めない点も共通している。前述の通り、Aの京劇の方には、妹の劉蘭芝に死なれて怒った兄が、焦仲卿の家に刀をもって殴り込み、焦仲卿の母親を突き飛ばす場面を新たに付け加えており、劇中での悪役に対する報復が行われているので、その点では、『心

「心中宵庚申」の最期とは違っている。

この改訂は新中国になってからのものと思われるので、違っているのが当然の部分である。また、Aの京劇の方では、死んだ妻の墓を訪ねて来た焦仲卿の前に、幻の劉蘭芝が現われ、二人のつかの間の愛の映画が用意されている。姑の声ですぐに幻は消え、元の墓場に戻り、その傍らの木の枝に首を吊って焦仲卿は死ぬ。幻の場面の設定は多分近代的な演出であるが、主人公達の劇中での救済の効果を目指しているらしい。

近松が主人公達の死後の世界での救済を「未来成仏疑いなき恋の手本となりにけり」といった結句で試みたように、「来世救済」という言葉だけはあるが、劇の中に用意しているのと、その次元は異なるにしても、広い意味では劇の方法としては共通するものと言いうことが出来そうである。

どちらの作品も、相互にその存在を知っていた訳ではないにも拘わらず、姑が原因になった夫婦の心中という共通の状況設定のお陰で、千数百年も隔たりながら、共通する所が多い演劇が作られていたことは、両国の文化・演劇の交流の為にも広く知られることが必要である。